

若者カップルのコミュニケーション行動に関する研究

–4週間のダイアリー調査とインタビュー調査を通して–

Communications Behavior of Young Couples

–Through Four-Week Activity-Telecommunications Diary and Depth Interview Surveys–

丹羽 由佳理*・大森 宣暁**

Yukari Niwa* and Nobuaki Ohmori**

This paper investigates interactions between face-to-face meeting and telecommunications of young couples. Four-week activity and telecommunications diary survey and in-depth interview were conducted for 15 young couples living in Tokyo. Mobile e-mail was dominant as a telecommunications means and about 50% of the use of telecommunications was with the partner. There was variability in activity duration and locations of face-to-face meeting, and the frequency of telecommunications with the partner, among the couples with different living styles: living together, alone or with family members. Satisfaction levels of daily life were correlated with the amount of face-to-face contacts but not with the frequency of telecommunications. Most of the couples were satisfied with the amount of telecommunications, but about half of them were willing to increase the amount of face-to-face meeting.

Keywords: young couple, communications, telecommunications

若者カップル, コミュニケーション, 通信

1. 研究の背景と目的

携帯電話やインターネットなどの情報通信技術の急速な発展と普及により、人々のライフスタイルはモータリゼーション以来の大きな変化を遂げている¹⁾。携帯電話やインターネットを利用することで、都市で生活する人々は、時間・空間の制約を受けずに、他人とコミュニケーションを行い、Webサイトから様々な情報を入手することが可能となっている。また、携帯電話の機能の向上や、特定のグループ内でWeb上のコミュニケーションを行うソーシャル・ネットワーク・サービス(SNS)など、多彩なサービスが続々と開発され、コミュニケーションの方法も多様化してきている。特に、10~20代の若年層は、他の年齢層と比較して、日常生活における私用目的の携帯電話の利用頻度が高い傾向が見られる。また、人々の情報通信技術の利用と生活活動および交通行動との関係を理解することは、交通システムや施設整備の方向性を含めてIT時代の都市のあり方を再検討する上で必要不可欠であるものと考えられる。

本研究は、特定の相手との私用目的のコミュニケーションに着目し、独自のダイアリー調査およびインタビュー調査で得られた詳細なデータを分析することで、ミーティングと通信の実態や意識との関係を明らかにし、両者の相互作用(代替・補完関係)を考察することを目的とする。また、研究対象は、私用目的の携帯電話利用が比較的多い若年層で、さらに通信相手の中で最も親密なコミュニケーションを行っていると考えられる交際相手とのコミュニケーションに着目するため、20代のカップルを研究対象とする。

2. IT時代におけるコミュニケーションと本研究における仮説

(1) 既存研究のレビュー

通信と交通の相互作用に関しては、古くから代替・補完関係に着目した研究が数多く行われており²⁾⁶⁾、2つの観点からの分析が多い。一つは、テレワーク、テレショッピング、テレカンファレンスなどの通信を利用した新しい勤務形態や商業形態の普及に伴い、交通需要が増加するのか減少するのかという点であり、これまで、それらの目的の移動が代替され移動量は減少するが、節約された時間は自由目的の移動の増加をもたらす可能性があるといった議論が行われている。もう一つは、活動ダイアリーデータと通信ダイアリーデータを収集し、情報通信の利用によって個人の活動スケジュールにおける活動の追加・削除・修正がどのように行われているかという点である⁷⁾⁸⁾。特に携帯電話の利用により、従来と比較して、時間・空間の制約を受けずにコミュニケーションが行えることから、個人の活動スケジュールの動的な意思決定が可能となってきた。駅および周辺での待ち合わせ行動に着目し、待ち合わせの約束から実際に会うまでの通信利用実態や、遅れ連絡を受けた場合の最初に到着した人の待ち時間中の行動分析を行った研究も存在する⁹⁾。また、調査期間に関して、通信が交通行動に与える影響を分析するためには、通信は当日および数日後の活動スケジュールに影響を与えるため、複数日を対象とした調査が有効であるものと指摘されている⁷⁾。

一方、社会学の分野においても、従来から情報通信利用行動に関する研究が盛んに行われている。大規模な情報利用ダイアリー調査を実施して情報利用行動の詳細な実態や意識の把握や時系列変化の分析を行った研究¹⁰⁾や、携帯電話利用に対する意識や社会的影響に関する国際比較を行った研究¹¹⁾¹²⁾などが存在する。この分野での研究は、特に人々の通信利用に対する心理的側面に着目したものや、時間次元には着目しているが空間次元にはあまり着目していないものが多い。

* 正会員 東京大学大学院新領域創成科学研究科社会文化環境学専攻 (The University of Tokyo)

** 正会員 東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻 (The University of Tokyo)

近年欧米では、移動とインターネット利用の実態と意識およびそれらの相互作用を把握するためにコンピュータ・ベースのダイアリー調査システムを活用した研究¹³⁾や、活動・移動・通信を同時に記録するダイアリー調査票を提案し、約100人の参加者に対して一週間のダイアリーに関するパネル調査等が実施されている¹⁴⁾。しかし、特定の個人間の通信に着目して、ミーティングと通信の関係を探求する研究は、ほとんど行われていない。さらに通勤、業務、買物等、必需・拘束目的の活動に対する通信の影響に着目した研究は多く、活動スケジュールの動的変更の役割に着目した研究も存在するが、自由目的の私的な活動と通信との関係に着目した研究は非常に少なく、本研究の意義は大きいものと考えられる。

(2) 本研究における仮説

本研究では、通信を、交通の補完機能（ミーティングの日時の決定や変更などの意思決定の役割を担う）とミーティングの代替機能の2種類の位置付けに分類して考える。そして、日常生活におけるコミュニケーションの量と質は、ミーティングと通信によるコミュニケーションを合わせたものとして構成され、それが全体のコミュニケーションあるいは生活の満足度に影響を与えるものと仮定する。また、通信手段とミーティングの利用可能性に関して、通信手段の場合、固定電話やデスクトップ・パソコンを用いたインターネットの利用には空間的制約が存在するが、携帯電話の利用は、ほぼ空間制約はなく個人の活動スケジュールの時間制約のみで決定される。一方で、ミーティングの場合、本人と相手との時間と空間的制約によって決定される。場所の選択肢は、お互いの自宅および職場や大学等のベースとなる活動場所と、その他の都市空間における活動機会から構成されるが、お互いの居住形態（一人暮らし、家族と同居、同棲など）によって、自宅の利用可能性が大きく左右されるものと考えられる。また、当前のことであるが、2人が一緒にいる時のお互いのコミュニケーションは会話であり、別々の場所にいる時にのみ通信というコミュニケーションが行われる。よって、もし常に2人が同じ場所で活動していれば、お互いのコミュニケーションとして通信はほぼ全く発生しないものと考えられる。以上の仮説のもとで、ミーティングと通信との関係を分析・考察していく。

3. 調査概要

東京近辺在住の年齢20代のカップル15組に対して、2003年11月24日（月）～12月21日（日）の4週間の活動ダイアリーと通信ダイアリーを記録してもらうアンケート調査を行った。アンケート調査後に、1組ごと2人同時にデブス・インタビュー調査を行い、調査期間中の活動場所の地図上への記録や、日常生活の詳細、コミュニケーションに関する意識等を尋ねた。調査概要を表1に示す。ダイアリー調査票は、時間軸に沿って朝から夜までの活動内容を記録する自由記入形式の調査票⁸⁾であり、既存研究¹⁵⁾で利

用されたものを参考に改良を加えたものを利用した。カップルごとに交際相手との活動や通信を特定可能なように、誰と活動を行ったか、また、誰と通信を行ったかの記録を求めた。

被験者は、大学生・大学院生が大半である。交際暦は約1年～4年であり、比較的交際期間の長い安定期に入ったカップルが対象である。携帯電話を使用し始めた時期は、全員2001年以前であり、調査時には約3年以上の使用経験を有する。また、全員、交際相手との交際開始時には携帯電話を既に使用していた。日常的に利用する交通手段は、鉄道がメインである。居住形態に関しては、15組中4組は同棲しており、それ以外の別居カップル11組中、2組はお互い一人暮らし、2組はお互い家族と同居、残り7組はどちらかが一人暮らしである。4週間という長期に渡るダイアリーの記録を求めた理由は、通信とミーティングの関係を分析することを目的とするため、交際相手とミーティングを行う頻度を考慮すると、ある程度長期間の調査が必要であると認識したためである。しかし、非常に記録内容が多く、回答負荷の大きな調査であることを考慮して、一人当たり調査協力謝金1万円を支払うことを被験者募集時にアウンスしたが、18組中3組は途中で調査を棄権した¹⁾。

表1 調査概要

対象者	東京近辺在住の20代カップル15組
アンケート調査	<ul style="list-style-type: none"> ●ダイアリー調査期間 ・2003年11月24日(月)～12月21日(日)の28日間 ●調査項目 ・当日のスケジュール ・活動ダイアリー（開始・終了時刻、活動内容、開始・終了場所、同伴者、移動の場合の交通手段） ・通信ダイアリー（時刻、手段（携帯電話、携帯メール、固定電話、メール）、相手、内容（会話、会う約束、その他）） ・一日の満足度
インタビュー調査	<ul style="list-style-type: none"> ●調査日 ・2004年4月 ●調査項目 ・個人属性の詳細 ・調査期間中の活動場所の地図上への記録 ・コミュニケーションに対する意識

4. 分析

(1) ダイアリー・データの特徴

ダイアリー調査で得られたデータは、毎日の活動内容と通信利用を表現する時空間データである。図1に示すように、一日ごとにカップル2人の活動と通信の実態を、GISソフトウェアMapInfoのカスタマイズ用プログラミング言語MapBasicを用いて、時間軸上および地図上に自動的に表示するシステムを開発した。時間軸上には、朝3:00から深夜3:00までの24時間、自宅、自宅外、移動の3分類で、活動内容または交通手段を示している。交際相手と共に行った活動については別途着色を施している。また、通信手段別（電話とメール）に、通信した時刻に、電話およびメールを表現するマークを描いている。これも通信の相手が

交際相手とそれ以外で、色分けを施している。地図上には、調査期間中の活動場所を男女別に異なるポイントで描写し、その日の移動を矢印で示している。このシステムにより、どこでどれだけ、の時間、交際相手とコミュニケーションを行ったかという、1日の活動・交通・通信パターンの全体像、および調査期間28日間の日変動や規則性、カップル間のコミュニケーションのパターンの差異（平日に交際相手と活動するタイプ、主に週末のみ交際相手と活動するタイプなど）を直感的に把握することが可能となり、その後の分析を進めやすくすることができた。また、通常のダイアリー調査では、活動の記録は被験者の記憶に全面的に依存するため、活動時刻や内容には誤差が生じる可能性がある。図1からも把握できるように、特にカップル同士の記録を対応させると、活動時刻に多少の差が生じたり、特に短時間の移動が抜け落ちたりなど、両者が整合しない部分が存在してしまう。また、「誰と」活動を行ったかの記録を求めたが、交際相手との活動に関して、例えば、男性は交際相手と活動を行ったと記録しているが、女性は一人で行ったと記録している場合など、お互いの認識が異なる活動が存在することが確認された。また、通信ダイアリーでも、交際相手との通信に関して、通信時刻のずれや通信記録の抜け落ちが起こっている場合も見られ、全ての通信を対応させることは困難であるものと考えられる。これらは、紙の調査票記入形式のパーソン・トリップ調査をはじめとした、被験者本人の記憶に依存して行動記録を収集する種類のダイアリー調査に固有の問題点である。この記録誤差に関しても、本研究で開発したシステムにより、容易に確認することができた。以降の分析では、これらのカップル同士の記録が整合しない部分が存在することに注意されたい。

(2) コミュニケーションの量の分析

表2 コミュニケーションの集計指標

居住形態 (カップル数)	性別	交際相手との活動時間(分/日)				交際相手との通信回数(28日)					全通信 回数 (28日) (D)	C/D
		計(移動 含む) (A)	自宅 以外 (B)	一方の 自宅	B/A	携帯電 話(会話)	携帯電話 (その他)	携帯メール (会話)	携帯メール (その他)	全手段 全目的 (C)		
別居カップル (11)	男	131	38	76	33%	12	11	169	43	237	405	56%
	女	134	39	80	35%	14	9	177	26	230	513	46%
	計	133	39	78	34%	13	10	173	35	234	459	51%
お互い家 族と同居 (2)	男	70	45	12	66%	10	4	210	32	260	433	57%
	女	68	46	10	70%	23	10	259	26	327	776	41%
	計	69	46	11	68%	16	7	234	29	294	605	49%
どちらか が1人暮 らし(7)	男	120	35	69	27%	16	15	130	53	215	396	51%
	女	126	35	78	29%	16	10	138	21	187	439	45%
	計	123	35	74	28%	16	13	134	37	201	417	48%
お互い1 人暮らし (2)	男	232	43	163	19%	2	2	268	21	292	407	70%
	女	229	48	154	21%	0	2	234	44	281	512	55%
	計	231	46	159	20%	1	2	251	32	286	459	63%
同棲カップル (4)	男	184	33	137	17%	7	7	31	7	52	101	47%
	女	182	29	139	17%	6	6	30	7	51	202	23%
	計	183	31	138	17%	7	6	30	7	51	151	35%
計(15)	男	145	37	92	29%	11	9	132	34	188	324	54%
	女	147	37	96	30%	12	8	138	21	182	430	43%
	計	146	37	94	29%	12	9	135	27	185	377	47%

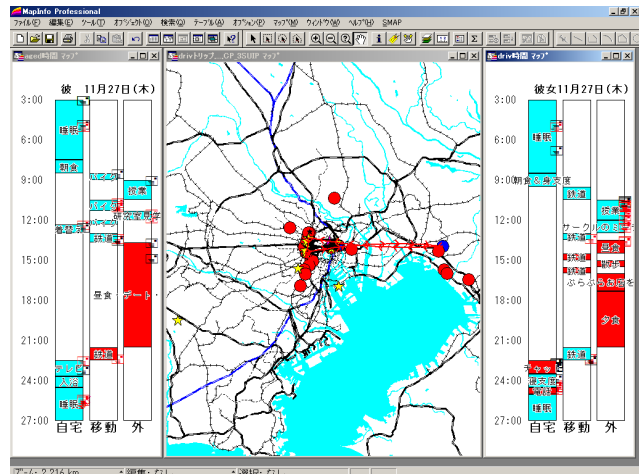


図1 一日の活動・交通・通信パターンの時間・空間上への表示例

表2に、調査期間中のコミュニケーションの量を表現すると考えられる活動時間および通信回数等を示す。交際相手と共に行った活動時間（睡眠時間を除く）は、一日平均146分である。居住形態別にみると、同棲カップル（183分）よりも別居カップル（133分）で短く、別居カップルの中では、お互い一人暮らし（231分）、どちらかが一人暮らし（123分）、お互い家族と同居（69分）の順に短いことがわかった。また、カップルどちらかの自宅以外の場所で、交際相手と共に行った活動時間の平均値は、逆に別居カップル（39分）が同棲カップル（31分）より長い。さらに、どちらかの自宅以外の場所で交際相手と共に行った活動時間が全ての場所での合計に対する割合は、同棲（17%）、お互い一人暮らし（20%）、どちらかが一人暮らし（28%）の順に高くなるが、お互い家族と同居カップルは68%と圧倒的に高い結果となった。これは、家族と同居している交際相手の自宅は、共に活動する場所として利用されにくい傾

向を反映しているものと考えられる。

交際相手と共に活動を行った日数は、別居カップルについては計 14 日間、そのうち自宅以外で共に活動を行った日数は計 7 日間である。同居カップルについては、毎日同じ住居へ帰宅するにも拘らず、交際相手と共に活動を行った日数は計 18 日間という結果となった。これは、実際は 2 人とも在宅していても、交際相手と活動を行っていないと記録された活動が存在するためである。

お互いの自宅以外での交際相手との活動場所に関して、お互いの自宅および職場（大学）からの距離の平均値を分析した（表 3）。その結果、同棲カップルは別居カップルよりも自宅や職場に近い場所が選択されていることがわかった。また、全体的には彼女の自宅や職場よりも彼の自宅や職場に近い場所が選択されていることがわかる。

以下に、交際相手との活動場所を選択する具体的な理由に関して、インタビュー調査の結果を示す。お互いまたはどちらかが一人暮らしカップルでは、「彼女の大学が彼の家に近いため、彼の家に行くことが多い」といった回答が得られた。お互いの自宅以外の場所では、「大学から近い場所（同じ大学に通う家族と同居カップル）」、「彼の家の近く（どちらか 1 人暮らしカップル）」、「彼の職場を考慮（女性は大学生の同棲カップル）」、「彼女の職場を考慮（男性は大学生の同棲カップル）」、「彼の自宅と大学および彼女の自宅から鉄道で行きやすい場所（1 人暮らしカップル）」、「お互いが行きやすく、彼女が通学で利用する鉄道乗換駅（女性が 1 人暮らしカップル）」など、自宅と大学および職場からのアクセシビリティを考慮して、活動場所を選択していることが確認された。また、特に女性が家族と同居しているカップルでは、「自宅は家族がいるので嫌」、「彼女は実家なので泊まれない」といった回答が得られ、やはり、家族と同居している自宅は活動場所として利用されにくいことが明らかとなった。

次に、交際相手との通信回数は、別居カップル（平均 459 回）よりも同居カップル（平均 151 回）で非常に少ない。全通信回数が非常に少ない 3 サンプルの存在もあるが、交際相手との活動時間が長い分、通信回数が少ないことが理由の一つだと考えられる。通信手段別にみると、全通信回数のうち携帯電話による通話が 16%、携帯電話によるメールが 76%と、携帯電話による通信が全通信利用の 90%以上を占めている。また、携帯通話よりも、携帯メールによる通信回数が約 8 倍多いことがわかる。携帯通話回数が携帯メール回数よりも多かったのは、2 サンプルのみであった。また、携帯通話、携帯メールともに、通信相手の約 50%が交際相手であるが、同棲カップルはその割合が低い（35%）ことがわかる。また、男女別では、男性（54%）の方が女性（40%）よりも交際相手との通信の占める割合が高い。通信内容を「単なる会話」と「その他」に分類すると、約 76%が単なる会話であり、通信の多くは、特に用事はないが、ミーティングにおける会話を補完するものと考えられるコミュニケーションの目的が多くを占めることがわかる。

既存研究¹²⁾で、携帯メールは「その時あった出来事や気持ちの伝達」や「特に用件のないおしゃべり」目的で利用されることが多いことがわかっているが、本調査サンプルも同様の傾向を示している。

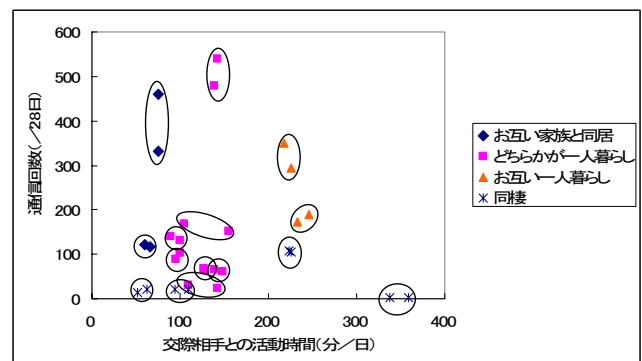
表 3 自宅外での交際相手との活動場所

居住形態	彼の自宅からの距離 (km)	彼の職場 (大学) からの距離 (km)	彼女の自宅からの距離 (km)	彼女の職場 (大学) からの距離 (km)
別居カップル	10	7	18	17
お互い家族と同居	5	17	27	4
どちらか 1 人暮らし	6	8	16	20
お互い 1 人暮らし	10	10	17	17
同棲カップル	5	5	5	12
計	9	6	14	15

(3) 活動時間と通信回数の関係

図 2 に、1 個人を 1 サンプルとして、交際相手との活動時間の一日平均値と交際相手との会話目的の通信回数の平均値の散布図を示す。両者には一見明確な関係は見られないが、同棲カップルの通信回数が少ないこと、また別居カップルでは、お互い一人暮らしカップルの活動時間が長いこと、お互い家族と同居カップルの活動時間が短いこと、どちらかが一人暮らしのカップルがその中間に位置することがわかる。なお、お互いの自宅および職場の位置関係をもとに分類して同様の分析も試みたが、居住形態で分類した方がその差が明らかとなった。

表 4 に、交際相手との活動時間と会話目的の通信回数およびその他目的の通信回数との相関関係を示す。会話目的の通信回数については、各個人の各日の値を 1 サンプルとすると、活動時間と負の相関が確認され、活動時間が長いほど会話目的の通信回数が少ない傾向がわかるが、各個人の 28 日間の集計値を 1 サンプルとすると、有意な相関は見られなかった。また、その他目的の通信回数については、有意な相関関係は認められなかった。このことは、通信は 2 人が別々の場所で活動している時のみ発生することや、会えない時に会話目的の通信回数が増えるが、図 2 から明らかのように、カップルごとにコミュニケーションの



注) カップルごとに円で囲っている。

図 2 交際相手との活動時間と会話目的の通信回数

量に差があることを表現する結果であるものと考えられる。

表4 交際相手との活動時間と通信回数の相関係数

変数の組み合わせ	各個人の各日の値を1サンプル, n=840	各個人の28日間の集計値を1サンプル, n=30
交際相手との活動時間&会話目的通信回数	-0.1399*	-0.0540
交際相手との活動時間&その他目的通信回数	0.0066	-0.0217

注) *p<0.01

(4) 一日の満足度に関する分析

ダイアリー調査票は1日ごとに分類され、一日の満足度の5段階評価(1:満足~5:不満)と、その評価の理由の自由記述欄を設けた。表5に一日の満足度と各変数との相関分析の結果を示す。各個人の各日の交際相手との活動時間と満足度とに有意な相関関係が認められるが、交際相手との通信回数と満足度とには有意な相関関係が認められなかった。また、満足度評価の理由の自由記述欄における、交際相手との活動内容の記述の有無と満足度とも有意な相関関係が存在した。以上の結果は、交際相手との活動時間の長さや、交際相手との活動内容の質が満足度を向上させるが、通信回数はそのような役割を持たないことを示すものと考えられる。また、通常、交通は活動の派生需要であり、移動時間は短い方が望ましいと考えられるが、交際相手との移動時間は単純に短いほうが望ましいとは言えない可能性があることも示唆する結果が得られた。

表5 活動時間、通信回数と一日の満足度の相関

変数の組み合わせ	相関係数
交際相手と家での活動時間&満足度 (n=821)	-0.1450*
交際相手と外での活動時間&満足度 (n=821)	-0.2133*
交際相手と移動時間&満足度 (n=821)	-0.2102*
交際相手と会話目的通信回数&満足度 (n=821)	-0.0031
交際相手とその他目的通信回数&満足度 (n=821)	-0.0271
彼・彼女の内容の有無&満足度 (n=821)	-0.2217*

注) *p<0.01

(5) コミュニケーションに対する意識 (5段階評価)

ダイアリー調査後に行ったデプス・インタビュー調査で得られたコミュニケーションに対する意識の分析を行い、前節までの結果の解釈を加える。表6に、コミュニケーションに対する意識に関する質問の回答結果を示す。(1)の「通信をしていると会いたくなるか?」との質問に対しては、30人中16人が「そう思う」と回答しているが、同棲カップルでは8人中2人のみであった。特に別居カップルにとって、交際相手との通信がミーティングの需要を誘発する可能性を示唆しているものと考えられるが、(2)の「交際相手と通信ができれば会えなくてもよいか?」という質問に対しては、1人を除いて「そう思わない」と回答している。このことは、前節における通信回数と満足度とに有意な関係が見られなかったこととも整合し、通信だけでは

コミュニケーションは満足されないことを表す結果である。(3)の「交際相手との通信回数を現状よりも増やしたいか?」との質問に対しては、それほど通信回数の多くない2人が「そう思う」と回答したが、23人は「そう思わない」と回答しており、多くが現状の通信量には満足していると考えられる。特に通信回数の多い3組については、6人とも「そう思わない」と回答している。一方、(4)の「交際相手と会う回数を現状よりも増やしたいか?」との質問に対しては、10人が「そう思う」と回答し、比較的活動時間が少ない人では「そう思わない」人が多く、活動時間が多い人では「そう思う」が多いという結果となった。この結果は、単純に活動時間のみではなく、活動の質にも関係することを示唆するものであると考えられる。

表6 コミュニケーションに対する意識

質問内容	そう思わない(1)⇔そう思う(5)				
	1	2	3	4	5
(1) (携帯)電話や(携帯)メールで交際相手とコミュニケーションをとっていると、実際に会いたくなりますか?	5	2	7	14	2
(2) (携帯)電話や(携帯)メールで交際相手とコミュニケーションがとれれば、会えなくてもよいですか?	18	11	0	0	1
(3) 今よりも、交際相手ともっとたくさん通信をしたいと思いませんか?	11	12	5	1	1
(4) 今よりも、交際相手ともっと会いたいと思いませんか?	6	6	8	8	2

(6) コミュニケーションに対する意識 (自由回答)

インタビュー調査の最後に、「実際に会うことと携帯電話やメールなどでコミュニケーションをすることはどのように違うと感じていますか?」、「特に、交際相手とのコミュニケーション手段として携帯電話やメールなどを利用することはどのような点で有効である(または不都合を感じる)と思いませんか?」という質問を行った。その結果、「携帯やメールはコミュニケーションとは認めない」、「会うことが大事で、文字だけでは伝わらない」など、通信だけでは十分なコミュニケーションが行えないという意見があった。一方、「会えない時にはとても便利なもの」、「いつでも連絡が取れるから便利」といった意見もあったが、特に「待ち合わせの手段として便利である」との意見が多く、ミーティングの代替機能というよりもミーティングのための補完機能の方が大きいと考えられていることが伺える。

5. 結論と今後の課題

本研究では、少数サンプルではあるが、東京近辺在住の20代のカップル15組から得られた4週間の活動ダイアリーと通信ダイアリー、活動場所および意識に関する詳細なデータを分析することで、以下の知見を得た。

- 通信の90%以上は、携帯電話を用いて行われており、固定電話やパソコンを用いた通信はほとんど利用されていない。携帯電話利用の中でも、携帯メールの利用が音声通話の利用よりも非常に多く行われている。

- ・通信の約半数は交際相手との私用目的のコミュニケーションである。
- ・同棲、お互い一人暮らし、どちらかが一人暮らし、お互い家族と同居といった居住形態の違いが、交際相手とのコミュニケーションの量および活動場所に影響を与えている。
- ・各個人の各日の交際相手との活動時間と会話目的の通信回数には負の相関があり、会えない時に通信がコミュニケーションの代替機能を担っている可能性があるが、各個人の28日間の集計値ではそのような関係は見られない。
- ・一日の満足度には、交際相手との活動時間が影響を与えている可能性があるが、通信回数は満足度に影響していない。
- ・通信回数は現状でほぼ満足しているが、ミーティングの量については現状より多くの量を望んでいるカップルが半数存在する。

以上を総合すると、若者カップルにとっては移動時間を含めてミーティングが最も重要なコミュニケーションであり、お互いの居住地や職場・大学および居住形態に依存して活動場所を選択している。会えない日には携帯電話、特にメールによるコミュニケーションを通して日常的な会話の需要を満たしているが、ミーティングの量には満足していないカップルも多い。以上の結果は、より高質な内容の通信が可能となる機能に対する需要や、ミーティングが可能な時空間制約を緩和すること、そして交通システムの改善によるアクセシビリティの増加が、カップルのコミュニケーションに対する満足度、さらには一日の生活の満足度を向上させる可能性を示唆する。IT時代の都市機能として、さらに高度な通信システムの整備と共に、ミーティングを促進するためには、交通システム、そして快適にミーティングを行うための活動機会を提供することが有効であると考えられ、本研究は、活動・交通・通信システムの三者が適切に組み合わせられた都市の有効性を支持する一つの事例を示すものとする。

今後の課題としては、まず、今回の分析ではあまり扱っていない都市空間上での具体的な活動場所の情報を活用した分析や、コミュニケーションの可能性を表現すると考えられる時空間アクセシビリティ指標など、日常生活における時空間制約の指標を、通信手段の利用可能性¹⁶⁾や交通ネットワーク上での移動時間をもとに詳細に算出し、交通費および通信費の金銭的制約も含めて、コミュニケーションとの関係を検討したいと考えている。また、被験者にできるだけ負担をかけずに詳細なデータを収集するための調査手法の検討が必要である。それによってサンプル数を増加させることも容易となろう。一方、SNSなど複雑なコミュニケーション形態に関するデータの収集と分析に関しても今後の課題である。また、特にインタビュー調査においては、プライバシーの問題から、核心に迫った具体的な発言を引き出しにくい面もあり、その点に関する工夫も必要で

あるものとする。

【補注】

(1) 調査依頼時には、普段どおりの行動をするようお願いをした。インタビュー調査において、調査票への通信の記録が負担であったとの回答は多かったが、それが原因で通信回数を控えたと回答した被験者はいなかった。調査協力謝金の額については、概ね妥当な金額であるとの回答を得た。調査協力謝金は、被験者の行動には影響を与えず、調査参加率の向上に寄与したものとする。

【参考文献】

- 1) 北村隆一編 (2001) ポストモータリゼーション, 学芸出版社
- 2) Salomon, I. (1985) Telecommunications and travel: substitution or modified mobility?, *Journal of Transport Economics and Policy*, pp.219-235.
- 3) Salomon, I. (2000) Can telecommunications help solve transportation problems?, In D.A. Hensher and K.J. Button, *Handbook of Transport Modelling*, Elsevier Science Ltd, pp.449-462.
- 4) Mokhtarian, P.L. (2000) Telecommunications and travel, In *Transportation in the New Millennium*, Transportation Research Board, Washington, DC., http://www4.nationalacademies.org/trb/homepage.nsf/web/millennium_papers.
- 5) Golob, T.F. (2000) TravelBehavior.Com: activity approaches to modeling the effects of information technology on personal travel behavior, Resource paper for the 9th International Association for Travel Behaviour Research, Gold Coast, Queensland, Australia.
- 6) 平本一雄編 (1999) 新時代の都市計画 6-高度情報化と都市・地域づくり, ぎょうせい.
- 7) 大森宣暁, 室町泰徳, 原田昇, 太田勝敏 (2001) 情報通信利用が個人の活動スケジュールに与える影響, *土木計画学研究・論文集*, Vol.18, No.4, pp.587-594.
- 8) Nishii, K., K. Sasaki, R. Kitamura and K. Kondo (2005). Recent developments in activity diary-based surveys and analysis: some Japanese case studies, In: *Progress in Activity-Based Analysis* (Edited by H. Timmermans), Elsevier, Oxford, 335-354.
- 9) Ohmori, N., T. Hirano and N. Harata (2006) Meeting appointment and waiting behavior with mobile communications, 85th TRB Annual Meeting CD-ROM.
- 10) 東京大学社会情報研究所編 (2001) 日本人の情報行動2000, 東京大学出版会.
- 11) モバイル・コミュニケーション研究会 (2002) 携帯電話利用の深化とその影響.
- 12) 吉井博明ら (2005) 携帯電話利用の深化とその社会的影響に関する国際比較研究, 平成13年度～平成15年度 科学研究費補助金研究成果報告書.
- 13) Lee-Gosselin, M. (2005) Activity and travel planning among under-26s in Canada: indications of the role of ICTs, presented at 84th TRB Annual Meeting, Washington D.C.
- 14) Kenyon, S. (2004) Reshaping patterns of mobility and exclusion? Measuring the impact of virtual mobility upon the nature and extent of participation amongst key social groups: a methodology, Presented to Alternative Mobility Futures Conference, January 2004, Lancaster University, UK.
- 15) 丹羽由佳理, 大森宣暁 (2003) 遠距離恋愛カップルのコミュニケーション行動に関する考察, *土木計画学研究・講演集*, Vol.27, CD-ROM.
- 16) Martin Dijkstra (2004) ICTs and accessibility: an action space perspective on the impact of new information and communication technologies. In Beuthe, M., V. Himanen and A. Reggiani (eds.) *Travel Demand and Organization in an Evolving World*, pp. 27-46, Berlin, Springer.